

女子急性単純性膀胱炎の臨床症状に対する Tiaprofenic acid の効果

福島労炎病院泌尿器科（部長：佐藤春郎）

千	葉	隆	一
石	井	延	久
鈴	木	孝	行
豊	田	精	一
大	山		力

EFFECTIVENESS OF TIAPROFENIC ACID ON CLINICAL SYMPTOMS OF ACUTE SIMPLE CYSTITIS IN WOMEN

Ryūichi CHIBA, Nobuhisa ISHII,
Takayuki SUZUKI, Kōichi TOYOTA
and Chikara OYAMA

*From the Department of Urology, Fukushima Rosai Hospital
(Chief: Dr. H. Sato)*

Acute simple cystitis is very easily cured by the proper use of an antibiotic. However, at times, such irritation symptoms in the bladder as micturition pain, pollakisuria and pyuria disappear. Consequently, medication to remove these irritation symptoms in the bladder at the earliest possible date, is required. However, there are no established standards for treatment in terms of the administration method and the administration period, etc.

We gave a new non-steroid anti-inflammatory drug, tiaprofenic acid (SURGAM) to women suffering from acute simple cystitis who strongly complained of bladder irritation symptoms especially of micturition pain.

The administration was carried out concurrently with an antibiotic, and its effectiveness was studied. As a result, micturition pain showed 86% improvement on the 1st day after starting administration, and it is thought that the concurrent use of this product with an antibiotic can probably remove the patients' complaints quickly and prevent the meaningless administration of antibiotics due to the persistence of symptoms and, subsequently, there is the possibility of shortening the period of administration.

Key words: Tiaprofenic acid, Acute cystitis, Micturition pain

急性単純性膀胱炎は適切な抗生物質を使用すればきわめて治癒せしめやすい疾患であり、したがって私も泌尿器科医も、これらに対しては適当な抗生物質乃至抗菌剤を投与するのみで、ほぼ事なれりとする場合が多い。

しかし排尿痛、頻尿、残尿感などの膀胱刺激症状は

細菌尿、膿尿が消失してもなお存続することがあり、さらに本疾患が易再発性であるがゆえに、うちにはPSD的病像を呈してくる場合すらある。

したがってこれらの膀胱刺激症状をできうるかぎり早期に除去する目的で補助的薬剤を使用することがより適切な抗生物質投与とともに必要であろう。

今回私どもは膀胱刺激症状、とくに排尿痛を強く訴える女性急性単純性膀胱炎症例に対し、新しい非ステロイド性抗炎症、鎮痛剤である Tiaprofenic acid (製品名、スルガム) 600 mg を2～4日間抗生物質とともに投与しその効果について検討を加えたので、その成績について報告する。

症 例

福島労炎病院泌尿器科を1984年9月より同年10月末までの2カ月間に来診した女性外来患者で、急性単純性膀胱炎と診断された49例中、臨床評価の可能であった43例である。

症例背景

年齢は17歳より64歳までであり、平均年齢は32.8歳であった。

また発症より来院までの期間は2～3日目が24例と最も多く、また臨床症状では43例全例が排尿痛を訴えており、ついで頻尿38例、残尿感34例、下腹部不快感29例の順であった。

臨床検査成績では尿沈渣にて43例中28例が膿球多数、13例が15～30、2例が9～14であり、同様検鏡で細菌(+)とされた症例は37例、60%であった。

投 与 方 法

抗生物質(主として Fosfomycin 3 g day, per/os または Norfloxacin 600 mg day, per/os)とともに Tiaprofenic acid 600 mg を同時投与した。

効果判定

投与24時間後に来院せしめ、症状の推移につき河田らの4段階評価に基いた判定をおこなった。すなわち排尿痛の程度は(Ⅲ)、(Ⅱ)、(Ⅰ)、(－)の4段階に分類した。

(Ⅲ)はきわめて強い(排尿時とび上るほどいたくて、なんらかの処置を希望する。)(Ⅱ)、あきらかに病的(排尿時に相当痛いと感じるが辛抱できる。)(Ⅰ)、軽度(排尿時に痛いと感じるが辛抱できる。)(－)、なし、

また頻尿、その他の症状についても同様に(Ⅲ)きわめて強い、(Ⅱ)あきらかに病的、(Ⅰ)軽度、(－)なしと分類した。

これらに対する薬効判定は前述した河田らの分類に基づき、Table 1 のごとく判定基準を定め、有効、著効を薬効ありと判定した。

また今回の trial では臨床症状のみにその視点をおいたため尿沈渣所見および尿中細菌については投与前後に一定の検索を施行したが、それに対する評価は

Table 1. 自覚症状に対する効果の判定

判定時 投与前	(Ⅲ)	(Ⅱ)	(Ⅰ)	(－)
(Ⅲ)	不 変	有 効	有 効	著 効
(Ⅱ)	不 変	不 変	有 効	著 効
(Ⅰ)	不 変	不 変	不 変	著 効

おこなわなかった。

投与前の背景 (Table 2)

まず臨床症状についてみると Table 2 のごとくであり、排尿痛では43例中(Ⅲ)31例、(Ⅱ)10例、(Ⅰ)2例で本症状が膀胱炎患者の主訴の大部分を占め、かつ苦痛が強いことを示していた。

Table 2. 投与前の臨床症状

症状の程度 自覚症状	(Ⅲ)	(Ⅱ)	(Ⅰ)
排 尿 痛	31/43	10/43	2/43
頻 尿	6/38	20/38	12/38
残 尿 感	4/34	24/34	6/34
下腹切不快感	1/29	11/29	17/29

また残尿感は本症状を訴えた34例中(Ⅲ)が4例、(Ⅱ)24例、(Ⅰ)6例と前者と比較すると症状発現率はやや低く、かつ症状の程度も(Ⅱ)が一番多く mild であることがわかる。また本症状を訴える大部分の症例は頻尿の訴えが合併していた。

頻尿は38例と排尿痛のつぎに rank させる症状ではあるが、これも(Ⅲ)6例、(Ⅱ)20例、(Ⅰ)12例と、残尿感とは同様の分布を示していた。

また下腹部不快感を訴える29例はそのほとんどが(Ⅱ)乃至(Ⅰ)に分布しており、(Ⅲ)の症例は1例のみであった。

投 与 成 績

排尿痛の改善度は良好であり、43例中37例86%に著効、有効例が認められた (Table 3)。

しかしその他の症状についてみれば、残尿感および頻尿についてはそれぞれ47%、39.4%と低値を示し、また下腹部不快感は31%と最も低値を示していた。

Table 3. 排尿痛に対する改善度

判定時 投与前	(H)	(+)	(-)	total
(H)	3	2	12	14
(+)	1	1	2	6
(-)			1	2

考 察

Tiaprofenic acid はフランスの Roussel Uclaf 社で開発された新しい非ステロイド性抗炎、鎮痛剤で、臨床的にも外国においては整形外科，耳鼻咽喉科，泌尿器科などで各種炎症性，疼痛性疾患に使用されており，その有効性が確立されている。

さて現在まで泌尿器科領域における急性単純性膀胱炎に対する治療としては抗生物質投与がおこなわれているわけであるが，これら抗生物質の UTI 基準²⁾による評価はされているものの，その投与方法および投与期間といういわゆる治療基準という点に関しては統一されたものはみあたらずさらに現在膀胱炎における各種愁訴に対する補助的な薬物療法については，それを検討した報告は認められない。

Table 4. UTI 基準に基づく膿球の推移

不 変	改 善	正常化
31/43	12/43	0/43

さらに河田らは急性膀胱炎において，UTI 基準上で治癒と判定された症例においても，各種の症状が残存する場合があることを述べており，さらに急性膀胱炎の経時的推移においても UTI 基準上の治癒率（尿中膿球の減少率および尿中細菌の減少率）よりも臨床症状があとから改善することが示されている。

これによれば抗生物質投与後第1日目では臨床症状とくに排尿痛は50%以上が残存するとされている。

したがって Tiaprofenic acid 600 mg の投与により，第1日目で排尿痛が43例中37例，86%に改善をみたことは本剤の効果と考えられ，本剤と抗生物質の併用が速やかに愁訴を除去し，ひいては症状の残存による無意見な抗生物質の投与を防止することができ，さらには治療期間の短縮につながる可能性を有していると考えられた。

なお，副作用については全例においてまったく認められなかった。

文 献

- 1) 河田幸雄・西浦常雄：尿路感染症に対する化学療法剤の薬効評価法について．第一報 単純性尿路感染症における薬効評価基準．日泌尿会誌 **70**：317～326，1979
- 2) 大越正秋・河村信夫：Chemotherapy **28**：321～341，1980

(1985年4月12日受付)